

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 5 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500690

研究課題名(和文) 運動指導原点としての動感志向性の解釈に関する現象学的研究

研究課題名(英文) A phenomenological study on the interpretation of motor intentionality as the basis of movement instruction

研究代表者

佐藤 徹 (Sato, Toru)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80125369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：体育・スポーツにおける運動指導においては、動きを外から見た形の欠点を指摘するだけでは改善は難しく、学習者の動感(キネステーゼ)にはたらきかけるアドバイスが必要になってくるが、それができるためには他者の動感を運動観察から解釈できる動感理解能力が不可欠である。本研究では、指導者が、学習者の動感志向性を把握する能力を獲得するために必要な基礎資料としての事例考察を進めた。とくに、抽象的運動や行動のシンボル形態など、現象学的視点から考察しない限り見えてこない人間特有の動感特性を例証した。

研究成果の概要(英文)：It is a proper competence for a physical education teacher to instruct movement techniques with sensually suitable advices, not to explain movement mechanism or physiological function. It is absolutely necessary, therefore, for the teacher to understand or interpret the motor intentionality of the student by the phenomenological method in HUSSERL's meaning. In this study, the intentionality in various movements of students or particularly children were considered as case study. From the many cases in the physical education class in school or in sport training the fact clarified; there are movements, that we are able to understand the meaning of the movement process without phenomenological idea, for example "abstract movement" or "symbolic movement" etc.

研究分野：スポーツ運動学

キーワード：動感(キネステーゼ) 志向性 運動指導 シンボル形態 抽象的運動

1. 研究開始当初の背景

運動指導の際には、動きを外部からとらえた欠点を指摘しても改善されることは少なく、意欲や意図、気分などのパトスの意識をもった人間が習得をめざすスポーツ運動の研究は、それを遂行している学習者の動感(キネステーズ)まで切り込んだ洞察が必要である。つまり、現象学的概念である“志向性”を分析することが運動指導者の最初の、そして不可欠の行為である。この“動感志向性”は行われている運動の観察を通して分析されることになるが、誰の目にも一義的に見える即物的なものではない。したがって、測定したり物的に証明したりできるものを対象とした機械論的分析ではなく、指導者の解釈による発生論的構造分析によるものである。

解釈行為には視点が必要である。それは、「現象は誰の目にもそのまま本質が見えるように露呈的に与えられてはいない」(谷徹『意識の自然』1988)ので、視点を獲得することによって初めて本質が見えるようになるからである。その視点を、メルロ＝ポンティの「現象身体」の概念(『行動の構造』、『知覚の現象学』)を拠り所として現象学的に探るのが今回の研究である。

スポーツ運動の習得ならびに指導における動感の重要性は、実際に動きを教える現場では古くから認識はされてきた。しかしそれは、誰にとっても同一な客観的内実ではないため、実践性の意義は認めつつも、研究という場面からは敬遠されてきたのが実情である。

近年になって、金子明友の『わざの伝承』(2002)、『身体知の形成』(2005)などの各書を通して“現象学的運動学”が体系化され、運動の研究は自然科学とは別の研究法、すなわち測定値による研究とは異なる観点から探求する可能性が理論的に正当化されるようになった。この現象学的意味での超越論的妥当性を論拠にする人間学的運動研究が推進されつつあるのが今日のスポーツ運動研究の現状である。これらの金子の著作で展開されている人間学的運動理論は、現象学者のフッサール、メルロ＝ポンティ、ヴァイツゼッカー、ポイテンダイク等の一般理論をスポーツ運動研究に発展させたものであり、スポーツ運動の習得過程の研究も人間の本源的内実まで踏み込んだものに深まってきたと言える。

本研究はこれらの理論を土台として、体育教材の運動に関して具体的な動感志向性の把握視点を明らかにし、指導現場へ提供することを目的とするものである。このような理念的追求がなされない場合には、初心者や運動が苦手な生徒に対する運動指導は、動きの外形的欠点の指摘や類似した動きの予備運動(運動アナログ)の形式的羅列といった表層的なものにしかならないからである。

これまでに科学研究費補助金の助成を受けて行った研究、「動きのコツをつかませる体育授業の開発」ならびに「動きの“コツ”の指導基盤としての能動的運動感覚意識の形成に関する例証的研究」において、指導者(教師)は教える運動に関して、無意識的に行っている動きの遂行感覚を能動的に意識化していくことが不可欠であることが明らかとなった。また、その方法論についても事例的に提示することができた。さらに、コツとは実体的にとらえられるものではなく、実施者の意識における動感差への気づきであることが明らかとなった。

これらの研究を通して次の点の解明が新たな課題として出現した。それは、学習者の動感志向性を的確に把握するには、それを理解するための予期図式というような視点の獲得が不可欠であるということである。ナイサー(『認知の構図』1984)が、「探し方を知っているものしか見ることはできない」という知覚循環の概念から説明しているように、それぞれの運動に関して教師が見るべきポイントをあらかじめ知っていることが重要である。しかもこのポイントは、ビデオや写真に写るような外部視点で観察できる性格のものではない。

そこで、体育授業で効果的な運動学習・指導活動を展開させるためには、それぞれの運動に関する志向分析のための解釈視点を明示することが、発生運動学にとって喫緊の課題であるという認識に至った。

2. 研究の目的

(1) 体育教師が運動指導において、学習者の動感志向性を的確に把握するためにはどのような視点から解釈行為を行うべきかという根源の問題について現象学的観点から探る。

(2) 現在の体育授業で取り入れられている様々な指導手法について発生運動学的観点から批判的検討を加えるとともに、感覚論的視点から効果的な運動学習の指針を提示し、効果を検証する。

3. 研究の方法

体育教材の個々の運動、ならびに戦術行動などについて、とくに初心者の動感志向性を発生現象学の方法を適用して、運動に対峙する者の地平論的構造(志向的含蓄)を明らかにする。それに基づいて、一般的に行われている指導上の問題点を批判的に指摘するとともに、感覚論的観点から初心者にも効果的な習練形態の体系を提示する。

4. 研究成果

本研究では、体育授業で行われる教材運動を題材として、教師など熟練者がそれらを無意識的に遂行(受動的キネステーズ)してい

る際の動感志向性を現象学的観点から顕現化させ、それによって明らかになった動感志向構造に基づいて、初心者やうまくできない者への促発(運動発生の促成指導)処方を適用し、その効用性について発生運動学的視点から分析、考察した。

考察対象としては、体育・スポーツで行われる個別の動き、ならびにボールゲーム等で典型的に現れる行動のシンボル形態(メルロ＝ポンティ)など、そのままでは(現象学的還元を施さない限りでは)気づかれることのないさまざまな運動形態である。本研究では、とくに“運動の見方”あるいは“観察ポイント”の対象は、視線の向け先としての物体的身体ではなく、現象身体を通して遂行している学習者の志向的内実であることを事例的に論証し、体育授業あるいはスポーツ指導において実践の有用性をもった動きの解釈視点を提示することを重視した。

具体的には、以下に示すように現象身体と動感志向性に関する基礎的研究、ならびに志向分析視点に関する例証分析を進めた。

(1) 運動学習、および指導における現象身体の固有性について現象学的観点から分析

メルロ＝ポンティによると、われわれは身体をもっていると同時に、われわれ自身が身体でもある。また、熟練した動きにおいてわれわれは身体を忘れた存在となる。このような、いわば習慣化した運動を行っている熟達者の運動感覚は、「動感匿名性」(金子)の次元にあり、自我の関与なく展開されている。すなわち、そのままでは人間の動き方の固有性に気づくことはできないため、個々の運動に関して現象学的還元を施すことによって、われわれの日常的、無意識的運動遂行を意識にのぼらせ、研究対象として措定できることになる。この場合、無意識的志向性、すなわち受動的キネステーゼを分析する方法は、発生論的現象学で用いられる「脱構築」(フッサール『受動的総合の分析』)によった。

(2) 個々の運動の動感志向性を具体的に分析するとともに、指導上の問題点を批判的に検討

上記の検討を、体育授業で一般的に指導されている運動教材について個別的、事例的に進めた。個人種目の運動技術に関しては、たとえば、跳び箱を怖がる子どもの動きは助走速度などに外的に確認することができるが、それを指摘しても跳べるようには決してならない。また恐怖心という心理的な面の指導も、運動を行っている者のキネステーゼと無関係に行っただけでは効果はない。この場合は、ヴァイツェッカーの意味でのプロレープシス(運動の結果の先取り)の原理を理解した上

で学習者の志向性を分析し、それに応じて当該学習者にとって適切な練習内容を処方しなければならない。このような個々の目標運動のための習練形態を体系的にまとめる作業を行った。

また、現象身体概念に基づく行動のシンボル形態、および抽象的運動について運動観察、ならびに志向分析の解釈視点に関して理論的構築を図った。

(3) スポーツ場面に現れるシンボル行動形態、および抽象的運動の同定

メルロ＝ポンティ(『行動の構造』)の現象身体論によると、動物の行動は、癒合的形態、可換的形態、象徴(シンボル)的形態が区別される。意味の同一性を土台とした多様な行動可能性としてのシンボル形態は人間に固有のものであるが、それは動物次元の可換的形態と外形的に区別するのは困難である。この行動のシンボル化能力はとくにオープンスキルを必要とするボールゲームの戦術力に具現されるが、それを評価できるためには動いている者の志向性の分析、解釈が不可欠である。本研究では、その具体的事例から動感能力を分析した。

(4) スポーツ運動に現れる抽象的運動の理解

遠投や走り幅跳びなどの運動は、具体的目的に向かった動きではなく、可能的空間にわが身を投射して構成する抽象的運動であることから、年少児や運動経験の少ない者にとっては難易度の高い課題となる。そのため、学習初期には具体的課題を設定する必要があることなどを教材の様々な運動で検討を進めた。

行動のシンボル形態や抽象的運動を問題定立することの困難性は、それを実施している教師など熟練者がそのままでは(現象学的意味での「自然的態度」)その存在を意識することはないという点にある。そのため、熟練者の意識のバックグラウンド(地平)にある多様な無意識的運動感覚(受動的キネステーゼ)の内実を明らかにすることによって、その運動ができるものにとっては“自明のこと”としてあえて対象とされることのない能力(キネステーゼ)が、初心者にとっては努力して習得しなければならない内容であることが確認される必要がある。本研究の主要な目的は、この内容(受動的キネステーゼ)を個々の具体的な運動で明らかにすることにある。

これらの無意識的感覚内容が顕現化されることにより、とくに指導者養成の大学等においては、実技能力の向上だけでなく、学習者の動感志向性を分析する専門能力の形成が不可欠であるという認識に至るものと考えられ

る。

上記の観点に基づいて、研究の成果を日本体育学会や日独スポーツ科学会議等で発表した。また、論文にまとめた。とくに、体育学研究に投稿し、採択・掲載された「運動発達査定における動感志向分析の意義」と題された論文は、本研究の全体成果の総まとめに位置づけられる。さらに、この論文を骨格として追加および改題し、“ Ueber die Bedeutung der kinaesthetischen Analyse bei der Diagnose und Bewertung der motorischen Entwicklung von Kindern -Eine phaenomenologische Betrachtung ueber die Genese der Kinaesthese als Krise-”というテーマをつけられたドイツ語論文は、ドイツの体育・スポーツ専門雑誌である Sportunterricht (Hofmann-Verlag) に掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

佐藤徹、運動発達査定における動感志向分析の意義、体育学研究、査読あり、59 巻 1 号、2014、67-82

Sato Toru、Ueber die Bedeutung der kinaesthetischen Analyse bei der Diagnose und Bewertung der motorischen Entwicklung von Kindern -Eine phaenomenologische Betrachtung ueber die Genese der Kinaesthese als Krise-、Sportunterricht、査読あり、Vol.63-4、Hofmann-Verlag (Germany)、2014、111-115

中瀬雄三・佐藤徹、ボールゲームにおける状況判断力の動感分析 - バスケットボールのパスミスについて -、北海道教育大学紀要(教育科学編)、第 62 巻第 2 号、査読なし、2012、1-12

[学会発表] (計 6 件)

奥田知靖・佐藤徹、未就学児のボールゲームにおける状況判断能力の変化、日本コーチング学会、2015 年 3 月 7 日、大阪体育大学 (大阪府)

KINOSHITA, Hidetoshi・SATO, Toru、Zur Konstitution des Bewegungsentwurfes des Anfaengers im Lernprozess der Sprunggraetsche ueber den Kasten、Jahrestagung der dvs-Kommission Geraetturnen、2014 年 9 月 2 日、ヒルデスハイム大学 (ドイツ)

佐藤徹、一般(統合)理論としてのコーチング学の可能性と方法、日本体育学会、2013 年 8 月 28 日、立命館大学 (滋賀県)

朝日奏絵・佐藤徹、運動実施における恐怖感構造の理解、北海道体育学会、2013 年 11 月 9 日、北海道教育大学函館校 (北海道)

SATO, Toru、Ueber die Bedeutung der kinaesthetischen Intentionalitaetsanalyse bei der Abschaetzung der motorischen Entwicklung von Kindern、The 8th German Japanese Symposium、2012 年 10 月 4 日、ミュンスター大学(ドイツ)

佐藤徹、観察対象としての動感発生、日本体育学会、2012 年 8 月 24 日、東海大学 (神奈川県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 徹 (SATO, Toru)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：

80125369